



## 社会科の格差

みんなが中流だと思っていた時代は終わり、一握りのお金持ちとそれ以外の人たちとの格差が広がっているのではないかと言われ始めていますが、今回は社会におけるそんな経済格差の話ではありません。小中学生の社会科が得意な人と苦手な人の格差の話です。

千葉県教育委員会から毎年5月下旬に公立高校の入試結果とその分析データが発表されます。平均点等のデータだけではなかなかわからないことなのですが、詳細項目にある科目別の得点分布のグラフから、今までになかった今年初めて見られる傾向が浮かび上がってきました。前期選抜の社会科において、平均点のあたりの人数が最も多くなる、いわゆる「富士山型」の正規分布のグラフではないのです。平均点よりちょっと下の点数のところに一つのピークがあり、平均点より15点くらい上の高得点のところにもう一つのピークがある、いわゆる「ふたこぶラクダ型」の分布なのです。これまでこの傾向は英語についてだけ見られたものです。英語は中学になって初めて全員が学ぶ科目のため、最初でつまずいて苦手になってしまうグループと、新しい言語を習得する楽しさを知って得意な科目になるグループとに分かれてしまう傾向がありました。社会も同じような要因での現象なのか、それとも今年の前期試験だけに限った、問題の難易度からくるものなのかは来年以降の傾向を注視していかなければなりません。

しかし、社会科を勉強するみなさんの中で何かが起きているのではないかと思ひあたることもあります。ここ数年、「一番苦手な教科は社会」と言う小中学生が結構いるのです。苦手なのが数学の文章題や英作文などならばよくあることですが、「社会の勉強の仕方がわからない」と真剣な顔で相談に来る生徒たちに対して、どうアドバイスをすれば良いのかは正直難しいところ。面談などでもお話している“翌日に習うところの教科書にざっと目を通しておくだけの予習”は効果があるはずですが、根本的な処方も必要なのかもしれない。本や新聞を読んだり、家族や友だちと会話したりする中で様々な方面への興味や関心が育っていくことが大切なのでしょう。